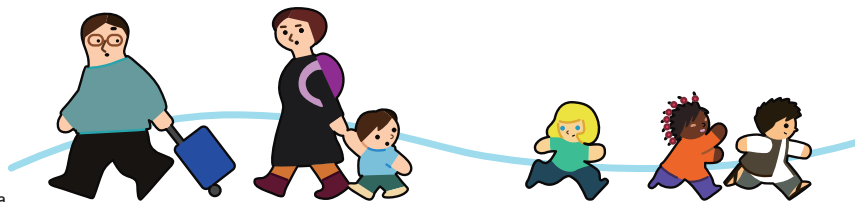


ドイツで考える家族の生活とキャリア



Illustrated by
Reona Nishinaga

二〇一九年春から、一家は
フランクフルトで初めての海外
生活を始める。長男は大人
しくて人見知りの小学一年生。
次男はまだ〇歳。家族を支え
るためにキャリアを中断した
久美子は、仕事で忙しい夫と
共にドイツで新たな生活を模
索していく……。

取材・文 松島 あおい

「私は変化が好き、引越しも大好き
です」と言う久美子。だから夫のドイツ
赴任が決まったときも、初めての海外生
活だけれど、前向きに受け止めた。夫は
それまでずっと海外勤務を希望し、その
ために勉強していたので、夫の念願がこ
なつてうれしかった。子どもたちにもい
い経験になるはず。

「いま思えば、それほど深く考えてい
なかったのです」とふり返る。
赴任が決まった当時、長男は小学一年
生、次男は〇歳。久美子は育休中で、職
場復帰に向けた準備も進めていた。日本
での子育ては基本的に久美子のワンオ

ペ。長男は夜
八時まで民間の
学童に預けてい
た。次男も夜九
時半までの保育
園に高い倍率を
突破して入園が
決まったばかり
だったので、辞
退するのは惜し
い気もした。



家の裏の緑道で

校になじむのに
時間がかかった。
でもそれは海外
でも日本でも同
じだろうから、
時間をかけて解
決するしかない
と思った。
フランクフル
トの学校につい
て情報を集め、

勤めていたのは出版社で忙しかったが、
子どもがいる同僚も多く、働きやすかつ
た。しかし配偶者の海外駐在に同行する
ための休業制度はなかった。
退職を決めたとき、同僚に「ほんとう
に行くの？」と聞かれたのが印象に残っ
ている。でも久美子は家族でいっしょに
経験を積み重ねる機会を大事にしたかつ
たから、迷いはなかった。

人見知りな息子の涙

もちろん不安がなかったわけではない。
最も心配だったのは長男が人見知りで大
人しいことだ。それまでも保育園や小学

インターナショナルスクールを選択した。
久美子は語学には苦手意識がある。だか
ら子どもには「英語」を学ぶチャンスと
与えたい。フランクフルトのインターナ
ショナルスクールには、アメリカ式、イ
ギリス式、ドイツ語と英語のバイリンガ
ルなどいくつかあるが、現地で見学した
アメリカ式のインターナショナルスクー
ルは敷地が広く開放的で印象がよかった。
長男の性格を考えると、アメリカ式のオ
ープンな雰囲気は正反対だが、それが逆
によいかもかもしれないと希望も託した。

家族がフランクフルトに到着したのは
二〇一九年の四月だった。最初の一カ月
は仮住まいでまだ旅行気分だったが、到



着後一週間もしないうちに学校が始まる。初登校の日、長男は当然のように泣いたけれど、なんとか先生といっしょに教室に入っていた。

しばらくしたいへんなのは覚悟していたが、ある朝、夫婦で学校に送ったあと、遠巻きに様子を見た

日のことは忘れられない。子どもたちは登校後しばらく校庭で遊ぶのだが、じつは長男はその時間が最も苦手だ。授業ならやることがあるからいいが、フリーフローの遊びでは、自分から輪の中に入っていけない。長男は体を硬直させ、遠目に見てもわかるほど暗い雰囲気を漂わせている。

「とてもショックで、見なければよかったですとさえ思いました。でも衝撃が大きかったのは夫の方でした。自分の都合で海外に連れてきたという罪悪感を覚えたようです」

なんとか一カ月が過ぎ、家族は仮住まいからきちんとした家に移ったが、その引越した当日に学校から「(長男が)泣いているが、理由がわからない」と電話がかかってきた。ガマンしていた何か

決壊してしまったようだ。彼は慎重な性格だから、英語も自信がつくまで話さないの、周囲と意思疎通ができない。こういうとき日本であれば久美子が先生と連携し、ママ友と支え合うのだが、到着したばかりで右も左もわからないし、何より英語が苦手だ。無力感を覚えた。

こうしてしばらくは泣いていた長男だが、やがてチェコ人の面倒見のいい女の子と友達になり、慣れてきた……と思ったら夏休みになってしまった。

「四月入学はタイミングが悪かったと、息子はいまでも言っています」

八月中旬が年度始まりなので、四月は学期途中での編入。でもすぐに二週間のイースター休暇があり、その後も六月から八月の半ばまで夏休み。その間にチェコ人の子は本帰国すると聞いて、久美子の方が泣きそうになった。当初は夏休みに一時帰国の予定だった

が、「いま帰国したらドイツに戻れなくなる」と思った。ここはがんばって慣れさせようと、夏の間はサマーキャンプに参加させ、長男には「暗い顔をして通う日々」となった。

ことばがわからない国でのケガ

でも悪いことばかりではない。何よりもドイツで、パパとの時間が増えた。日本では週末も両親のどちらかは仕事をしていたが、ドイツでは家族で過ごせる。公園に行くとドイツ人は親子全員でいっしょに遊んでいる。

また、赤ちゃんの次男と出かける。「ドイツ社会は優しい」と感じる。東京の都心ではベビーカーはいやがられ、何度「すみません」と言ったかわからないし、電車通勤や子どもの送迎で体力も消耗した。ドイツでは子連れを助けてくれる人が多い。

でもことばができないとサポートを得られないこともある。それを痛感したのは七月、夫が日本に出張していたときのことだ。次男が自宅でケガをした。出血がひどいので病院に行きたいが、ドイツ語ができない。久美子は止血しながら、長男に「パパに電話して」と頼んだ。夫が日本からドイツの



次男 秋になって家の裏の道も紅葉でいっぱい



アイスランドへの旅行で

職場に連絡し、同僚が救急車を呼び、病院につき添ってくれた。ケガは心配したほどではなく、治療後は、夏休みのギリシャ旅行の計画も予定を変更せずに済んだ。

だが、久美子の「無力感」は募った。

キャリア喪失と無力感

夏休みが終わって新学期が始まり、長男は新しいクラスで、ふり出しに「戻る」でも同じスクールバスに同級生が三人いて仲よくなったことに助けられた。またスポーツデイを観戦に行き、運動が好きで長男の笑顔を見て安堵した。長男が学校に行っている間も自宅であんまり長男のことを案じていた久美子だが、十一月ごろ「あ、今日は心配していない」と気づいた。ここまで八カ月かかった。

困難を克服してひと段落……と思ったころ、無力感に加えてキャリアを中断した喪失感がひしひしと久美子に襲いかかってきた。日本にいたころ

は、自分にとって仕事がここまで大きな存在だと認識していなかった。

そもそもドイツに来たのは「家族を支えるため」だった。日本ではワンオペでも手際よくこなし、ママ友のネットワークもあった。でもドイツではことばができないから、子どもたちの学校や病院のサポートに手間取り、役に立たない。

思いがけず強烈な「自信喪失」。ある日突然、フランクフルトの電車の中で、久美子は涙が止まらなくなっ

てしまった。キャリア中断の悩みを知る駐在歴の長い駐妻の先輩が久美子の話を聞いてくれて、気持ちだけが少しだけ落ち着いて。少し時間の余裕ができるよう、次男は一月から夫の会社に近いドイツ系の保育園に入園した。次男は活発な性格でまったく泣かなかった。

ドイツでロックダウン

そんなころコロナウイルスが流行し、ドイツでは二〇二〇年三月にロックダウンに入る。新たな危機……と思いきや、久美子は「これで助かりました」と言う。



次男の保育園の様子

長男はオンライン授業で本領を発揮した。教室では「手を挙げる」ことが苦手だったが、オンラインでは先生が指名するので長男も発言できる。さらに最後に残って先生に質問もし、思った以上に英語力があることが周囲にもわかった。一年間自分の中のために続けた英語が出てきたのだ。これで本人も自信をつける。

久美子自身は、学校の送迎のたびに「英語ができない」と引け目を感じていたが、いったん離れて冷静になった。元気な次男は当初は家において、久美子は長男のオンライン授業のサポートとの両立がたいへんだったが、保育園が優先的に再開し、保育園にオフィスが近い夫が次男を連れて通勤するようになった。夫は会社では個室で仕事をし、ときどきオフィスの窓から保育園の園庭で遊ぶ次男の様子を見ることができた。

それぞれが「ひと休み」を経て、フランクフルトでの生活は次の段階に入る。

(次号、後編に続く)

本欄では取材対象家族を募集しています。46ページのEメールアドレスへお気軽にご連絡ください。